"Mr. Chimney" and his Brother

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/18298

昭和煙突男と兄田辺寿利

橋　本　哲　哉

目　次

はじめに
I　兄より見たる「煙突男」
II　関連情報で明らかになったこと
むすびにかえて

はじめに

昨1997年,「煙突男田辺潔小論」[1)]なる論文を著わす機会をもった。戦前日本労働運動史上煙突男事件（1930年11月）は有名であるが，事件の内容についてはこれまであまり検討されてこなかったようである。そこで当事者の田辺潔に関して調べる必要性を感じて若干の調査を手がけたが，彼が金沢と縁のあることも含めていくつかの新事実を明らかにすることができた。その詳細をここで再論する気はないが[2)]，予想以上にこの事件は奥が深く，同時代の社会に大きな反響を呼んでいたこともあわせて承知した。

前稿では，今後の検討課題として，事件の経過を多角的に明らかにするために，当事者である田辺潔の発言はもちろんのこと，兄として事件に一定の関係を有していた田辺寿利の証言も発掘すること，北海道開拓にのぞんだといわれている田辺家の動向なども究明したいこと等を提示しておいた。兄の寿利は，これも前稿でやや詳しく紹介したが，日本におけるフランス社会学研究の第一人者で，いろいろな面で弟潔に影響を与えた人物であった。ちなみに，この田辺寿利も，短期間ではあるが金沢大学法文学部のスタッフとし

て，金沢に一定のかかわりをもっていた。

弟の引き起こした煙突男事件について，田辺寿利が直接語っている文章に接したのは偶然のことであった。たまたま当時の社会主義者がこの煙突男事件をどう見ていたのかと思い付いて，『堺利彦全集』の頁をめくってみた。その第６巻に短文の「煙突男」を見出したわけである。初出の雑誌『改造』も確認しておこうとその目次を開いた際，堺の原稿のすぐ後ろにあった田辺寿利の論文「煙突男とは？」[3]（以下，改造論文とも略す）の存在に気づいたのである。ついでに当時『改造』の対抗誌『中央公論』の目次を開いたところ，「兄から見た『煙突男』」[4]のタイトルにも接することができた（以下，中公論文とも略す）。この２論文を煙突男，同事件，田辺潔に関するこれまでの論考の中で引用されている形跡は，今のところ発見できていない。忘れ去られていた情報ともいえようか。

前稿で予想した通り，兄寿利の発言には事件との関連で傾聴すべき事柄が少なくない。また，その２論文に付随して明らかにすべき点もいくつかピックアップできるし，若干の新情報も収集した。これらのことに限定して，続稿をここに書きとどめたいと考える。

Ⅰ　兄より見たる「煙突男」

田辺寿利が執筆したふたつの論文は，いずれも『中央公論』『改造』両誌の1931年新年号に記載されているが，中公論文の末には1930年12月10日，改造論文には1930年12月11日の日付が記されている。事件直後の同じ時期に書かれているわけであるが，そのせいもあってか両論文は内容の重複が意識的に避けられているようである。大略で言うとすると，中公論文は事件を知って川崎に駆けつけて以降，現場において兄として田辺が関わった事柄を中心に記述されている。

一方，改造論文は事件の経緯についてはあまり触れずに，弟潔の成長過程，性向，そして思想状況などによってその内容が構成される，という具合である。どちらにもこれまでは不明で，当事者にしか知りえなかった「事実」がいくつか書き込まれているので，その点を中心として少々内容に立ち入って

検討することにしよう。

先に書き上げられた中公論文「兄より見たる『煙突男』」から検討するが，全体は400字詰20数枚の分量で，煙突事件，母と子，僕等の行動と警察・争議団・紡績工場，新聞と世論の４節からなっている。叙述の順に，重要と思われる点を以下整理する。

第１に，まず内外の新聞がこの煙突男事件を「労働争議史上の新戦術」等として大々的に取り上げ，アメリカの新聞では「ミスタ・チムニ」として報道されたこと，田辺潔の姓名・住所が判明したのは「十九日の夜」「時事新報の加藤重六君」が「大煙突へ，職業意識を離れ，死を決し」て「上空に於ける二十五分間の会見」をした結果であることなどを指摘している。この「時事新報」の報道・対応の模様に関しては次節で後述する。

次に20日の朝刊各紙が潔の名前を発表したため，寿利は「友人古野清人君に乞うて動向を求め，二十日午後三時頃川崎に行き」，「演説の声が弟のものであることを確め」た。その後川崎警察署長と面談し，弟の行動が「不敬行為にならぬ」ことを確認したこと，あわせて，「弟の命の保護を署長に依頼した」と述べる。

そのことを前提にして，第３に寿利は「争議と彼の生命問題とを切離し」，「後者だけを議するために署長，会社の工場長，争議団の責任者の会議を開くこと」を提案した。この「三方会議」開催について署長の同意をとったうえで工場長のところに赴き，説得して同意を得，さらに争議団側から「労農党本部員として糸川二一郎，中田惣寿，斉藤金治の三氏，及び団員岩瀬，石郷，岡，今村，舟越，千葉，渡辺の七氏」の選出されるのを待った。そのうえで午後11時，川崎署長に三者会議の開催を求めたが，「その必要を認めない」と拒否されてしまった。

第４に，その後午前２時（21日）に「労農党本部の石原善行氏」及び「山崎剣二，飯田五平，吉田網十郎」の４人が警察署に現れたが，それを寿利は「争議解決の曙光」だと「咄嗟に考へ」，署長が「僕と評議したことを否定して平気でゐたわけ」だと理解した。「かくて二十一日午後一時半，遂に争議は解決し」たと述べている。

第５に「富士紡は三菱系資本閥のものであり，今度の争議に於ける会社側

の参謀本部は丸の内工業クラブの中にあった」ことを明らかにしている。

最後に，この論文の結論的な意見として，田辺は事件報道に対して「今度ほど新聞の威力を，いや暴威を，まのあたりに見せつけられたことはない」と述べ，無責任な記事をいくつか紹介しつつ批判している。そして「新聞に期待してはいけない。新聞もまたブルジョアのものだ」と手厳しい指摘で締めくくっているのである。

田辺寿利の経歴については前掲稿で詳しく紹介したので繰り返さないが，以上の６点は，煙突男潔の近くにいて，その弟を最もよく理解していた実兄の事件への言及として，いずれも注目に値する発言である。ここではとくに重要だと考える第３と第４のふたつの問題について，若干の考察を加えておきたい。

新聞報道を主な情報とした従来の事件経緯のなかでは，兄の寿利はたんに弟潔の説得役以上には位置付けられてはこなかった。しかし自身の言によって，事件の打開のために寿利が一定の行動をおこなっていたことがはじめて明らかとなったのである。それは寿利が提案した警察・工場・争議団の三者による「三方会議」の開催で，その「会議の内容には絶対に口を出さない」が，「但し彼は争議と切離した生命問題の解決に不服を言ふかも知れない。それ故に，必要とあらば三者会合の決議に僕も署名しよう。なぜなら，彼は兄弟中で僕を一番信用してゐる筈だから」という内容であった。さらに「もしこの決定事項に弟が反対して降りないならば，彼の生命に対する責任は彼自身だけが負ふべきだ」[5]ともつけ加えている。

この提案をもって寿利は，警察・工場側・争議団（警察に検束されていた糸川等を含む）の順に説得を６・７時間も要して試みたが，結局彼の努力は不発に終わってしまった。その理由を明確にはしていないが，新たに争議支援にやって来た新労農党本部関係者がただちに検束されないのを見て，寿利は別な方途での争議解決を予想した。このことは前掲稿で触れておいたが，糸川等地元の争議団・新労農党関係者ではなく，それとはことなった立場の東京の党本部関係者に争議解決の交渉権限が与えられていた，あるいはより期待されていたと考えられる。この点は次の第４の問題と関連する。

田辺寿利の予想通り，党本部の石原美行等が交渉の中心に立った結果，21

日午後１時半に争議はようやく解決し，潔は無事大煙突から降り立った。石原は前掲稿で分析したように，新労農党委員長の大山郁夫から事件解決を命ぜられて東京から急遽駆けつけたのである。警察側は糸川二一郎（当時，新労農党出身の横浜市会議員）など当該地域の運動家ではなく，明らかに東京本部の関係者・幹部との間で問題解決を図ろうとしていた。その意味では，一番の当事者である富士紡の組合関係者さえ後景に退けられた観がある。寿利の言からすれば，警察側は東京からの幹部到着を待っていたとも考えられる。こうしたことは当時よく見られた傾向で，戦前労働争議のひとつの限界点でもあった。なお，後にも少し触れるように潔の煙突上での言葉から糸川との関係は証明できるが，石原の名前や潔との関係は確認できていない。

次は『改造』に掲載された「煙突男とは？」を紹介するが，これには「兄より見た彼の性行」というサブタイトルが付されている。こちらも中公論文とほぼ同様の分量で，病院で語る彼，自己発見の闘病法，禅から労働へ，煙突を下る，弟に与ふの５節構成である。

この改造論文は前述したように，田辺潔の成長過程とその間に形成された「性行」とか思想といった内面を取り上げており，煙突男事件そのものについては多く言及することをさけている。

内容の相当部分は，潔の少年から青年時代までの生い立ちに割かれている。詳細な箇所において若干の食い違いがあるが，前掲稿での筆者の整理は兄寿利という潔に最も近い近親者によって，おおむね裏付けられたといってさしつかえない。より具体的に明らかになった点は，長兄信一家族と潔との関係（とくに潔が結核の闘病中この長兄から受けた手厚い看護について）とその後の北海道有珠海岸での「新生活」の様子についてである。

後者の北海道生活はきわめて具体的に叙述されていて，医者の指示を守ってもなかなか治癒しないため「断然薬をやめ」て「近代医学と全く絶縁した」こと，「常人以上の荒っぽい生活をし」て，「海へ飛込む。犬と走る。山へ行く」。「寒い夜に」「海水を浴びる」といった行動によって「彼の精神は，完全に肉体を征服した」と述べている。

ここで注目すべきは，この北海道時代に「にしん船に乗って漁師の手伝い」をしたことや「マストのてっぺんにのぼることを覚えた」（寿利の知人米林富

男の談話)[6]といった点について兄寿利は一切言及していない。こうした潔の漁師としての「経験」について前掲稿では若干の疑問を呈しておいたが，寿利の発言のなかにそれがまったく見い出せないことは傍証のひとつになると思う。

この論文の掲載雑誌が『改造』であったこともあって，潔が労働運動へ関心をもってゆくプロセスとそのかかわり方とマルクス主義の問題に寿利はもうひとつの力点を置いて書いている。その一番の中心部分を，少々長文となるが次に引用しよう。

> 或日彼は真面目に言ひ出した。『僕は労働運動に身を投じます』と。僕は真向から反対した。『労働運動もとより可なりだ。しかしお前にはその資格がない。インテリの子は真の労働者になり得ない。そしてまた，真のプロレタリア意識は，真の労働者でなければ持ち得ない。僕は，労働運動に於いてインテリがその醜状を暴露した例を余り多く知ってゐる。弁証法を説き，階級闘争を論ずるだけでは，却って運動の邪魔になるだけだ』。彼は断乎として言ひ切った。『私は先づ労働者になります。真の労働を経験します』。闘病以後の彼は言ひ出したことを一歩も退かない男となってゐる。更に彼の意志力と度胸には，禅で磨がかかってゐる。僕はついに負けた。『よし真の労働者になるならよい。その代り額の皺を完全な労働者の皺にせよ』。(中略)
>
> 彼は其後時々思ひ出した様にひょっこり僕の家を訪ねる。来る度に彼の言葉は労働者らしくなって来た。曽つての様に，マルクスがどうのブハーリンがどうのと言はなくなった。少くともモボ・マルキストの域を脱した(以下略)。

兄寿利から潔が受けていた影響の程をここから読み取ることができる。と同時に寿利の思想，当時の言葉で言いあらわせば「左翼思想」であるが，その思想水準も合わせてうかがい知ることができよう。

そして最後の２つの節で煙突男事件の結末の部分を語っているが，次のようなことを述べて締めくくっている。

> 大衆の守護と監視とがなかったならば，生きて降りることができなかったかも知れない。お前はダラ幹を憎む。利己主義者を憎む。売名の徒を憎

む。それはよい。それは正しい。お前は決して大衆を裏切るな。どうせお前の命は無産大衆の前に捧げた命だ。ゆめおろそかに失ふべきでない。

こうした論文の終わり方も中公論文とはいささか異なっている。田辺寿利が両雑誌の性格の違いを意識していたのだろう。[7]

Ⅱ　関連情報で明らかになったこと

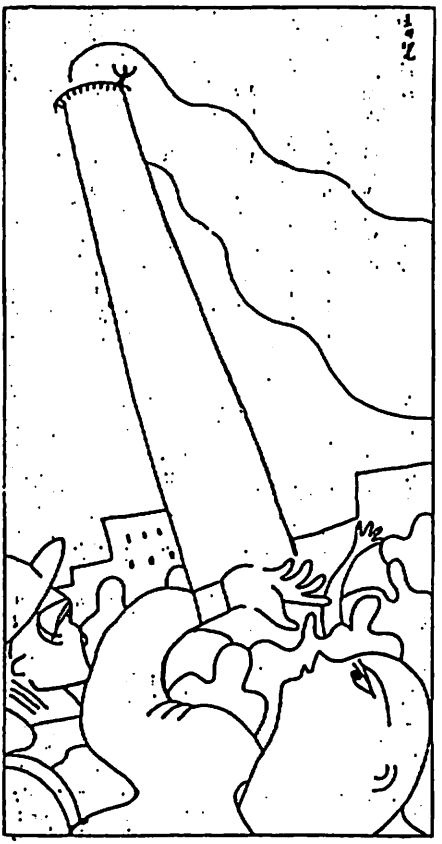
前節では煙突男の兄田辺寿利の２つの論文をもとに，従来必ずしも明らかにされてはいなかった事柄について論じてみたが，次にこの２論文に関連して見い出したところの，新たな資料や情報について少し考察をおこなっておこう。

まず，本稿を書く直接のきっかけとなった堺利彦のエッセイである。堺のそれは約300字という短い文章なので，その「煙突男」全文を初出の『改造』[8]から以下に引用する。

> 俳句のユーモウ，狂句の皮肉，川柳の痛快味。それがあの男の，あの仕事の上に結晶された。彼は実に階級闘争の即興詩人であり，即席画家であり，即演俳優である。あの遣り方は即ち又，漫画の実演でもあり，漫談の演劇化でもあり，時事短評の映画化でもあり，前衛短歌の実践化でもある。
>
> 彼は新聞社の写真班にスナップされつつ，自分で自分のストライキをスナップした。大衆の力を煙突の上に集中させておいて，それを具体的に，自分の一身に表現させた。そこに彼の誇りがあり，満足があった。そしてそこに社会的の効果があり，影響力があった。もちろん彼は，場合に依り，その一身を投げうつ覚悟をして居たらう。否むしろ心中窃かに，その興味にそそられる時もあつたらう。人間の事，つまりは生き方であり，死に方であり，命の使ひ方，棄て方である。『野郎やったな！』『日本一のユーモリスト』よ。

堺の表現は比喩的で婉曲であるが，煙突男の行動について「社会的の効果があり，影響力があった」と肯定的にみているといってさしつかえなかろう。このことは前掲稿で煙突男事件の評価が肯定・否定論の反対方向に分かれていることに言及したが，堺はその前者のグループに属するといえる。もっと

も「一身を投げうつ覚悟」「死に方」にも共感を示しているように受け取れる表現もある。堺は当時社会運動家の大御所として，満州事変直前の時期に無産運動の再結集に骨を折っていたが，その頃の心境を一部かいま見るようでもある。



注）『改造』1931年新年号より転載

堺のエッセイにはもうひとつ見落とせない情報が付加されている。それはもちろん堺の全集には収録されてはいないが，『改造』にはある東郷青児の筆になるところの左の挿絵である。スペースとしては堺の文章の分量を圧倒していて（１頁の３分の２程），読者の刺激をかきたてるような割りつけがなされている。東郷は現在では洋画家として，とくに甘美な女性像を得意とする画家としての名声と地位を得ているが，フランスから帰国直後の新進気鋭の時代に，煙突男事件とこのような関わりを持っていたことは興味深い。東郷に関する適当な伝記は見当たらないので不明だが，当時の若手芸術家の多くが社会的関心を強く抱いており，東郷もその例外ではなかったことの証明となろう。

また，堺のエッセイは田辺の改造論文の直前に置かれているが，中公論文の後には，吉村冬彦執筆の「煙突男」という時事雑感が載せられていることを付言しておく。この吉村の短評の中にも現れてくるが，煙突男が当時いかに話題性に富んだニュースであったかをうかがい知ることができる。

本稿の冒頭でも指摘したが，「時事新報」とその記者が事件の展開のなかで

特異な役割を果しているので，ここでは記事内容も含めて取り上げておく。この新聞は手元にはなかったので，前掲稿の執筆の時には参照できなかった。しかし，田辺の２論文に指摘があることから，今回は京都大学附属図書館所蔵のマイクロ版を利用させてもらった[9]。全体的に見て，煙突男事件に関する報道において，掲載写真も含めて最も情報量の多い全国紙であるといえよう。

そのなかから従来他紙の記事になく，筆者も気づかなかった事柄をいくつか拾い出すと，避雷針にくくりつけてある大赤旗を降ろすこととの引き換え条件で食糧を煙突上に持ち上げたこと（「時事新報」11月18日夕刊，以下月日のみ），「ほとほと閉口した富士紡工場」側が「五百万の懸賞で煙突の男引き下ろし」を謀ったこと（同11月20日），「雨に打たれながら友を呼ぶ煙突の男」「糸川は居ないか」（同21日），「煙突上の眠りうつらうつら／母や兄の夢ばかり見た／記者との再会見に嬉し泣き」（同22日朝刊）などである。とくに潔自身が，前述の活動家糸川二一郎の名前をあげていることをここでは重視したい。糸川を潔が最も信頼していたと思われるからである。

「大煙突上の男の正体判明／昨夜百三十尺の頂上で記者と会見／煤けた顔で人なつこく語る」。これがスクープ的な記事として田辺寿利も重視した潔との会見記事の見出しで，11月20日の朝刊に大きく掲載されている。「時事新報」は必ずしも見やすい資料とはいえないので，やや詳細に引用することにしよう。

富士紡，百三十尺の大煙突てっぺんの男は果して何者か，本社加藤記者はその正体を突止めるべく決心し，十九日午後七時ひそかに煙突の下に立った。

初冬の風はピュウピュウと気味悪い音をたててゐる。決心はしてゐるものの流石に一種言ひ難い感慨が迫る。やっと厳重に鉄条網をめぐらした鉄梯子を発見して一段々々上りだした。十段も登った頃，突如下ではただならぬ騒音が聞こえ「降りろ…危いぞ…」と云ふ鋭い叫び声（中略）。

やがて「おい上ってみろ，俺は一緒に心中するぞ」と上の男の声，恋人に逢った心持，ホッとして上を仰ぐと頂上とはものの三間とは離れてゐない所に真黒にすすけた空の男の顔…

記者「どうせ死ににきたのだ，死ぬ前に一度話そう」

男「駄目だ，上るなら上つてみろ」

漸く頂上にとつつく頂上は直径五尺位のコンクリートでかためられた上に，三尺巾のブリッヂが一周してゐる，ブリッヂの手摺りは煙と油でつるつるになってゐる。やっとブリッヂに立って下を眺めると，川崎から京浜一帯の電燈が豆ランプのやうに点滅してゐる。ああ遂に百三十尺の煙突のてっぺんであるのだ。記者が名刺をさし出すと

男「イヤ時事新報君か，どうも大変だったらう」と人なつこく傍によってきてすはる。みると煙突の煤煙で躰が全部真黒になってゐる。

男「最初は赤旗をたてたが，寒くて実はそれで頬冠りさ」

彼は大した元気だ，話してゐる内にも絶えず煤煙が二人を襲って息がつまって窒息しそうになる。

記者「誰か上がってきたかね，新聞社のもので…」

男「嘘だ，僕は上にきて誰とも話した事はない」と言ひながら寒さにガタガタふるへてゐる。

記者「食物はどうかネ」

男「食物はまだ沢山ある，煙草もマッチもまだ大丈夫だ，でも咽喉が渇いてやりきれない，もう一日水がなかったら，躰の血でもすすって我慢するつもりだ。君済まないがそのオーバーをくれないか」

記者「いやオーバーはやれない。ではチョッキをやらう」と空の男は記者のさし出すチョッキを身につけて大悦び。

男「ありがたう，感謝する。死を覚悟した俺だが，この上でまさか君に遭ふとは思はなかった。敵でも味方でも人間の顔なら嬉しいよ」と空の男はとても人なつかしそうだ。

記者「うちでは心配してゐるだらう」

男「兄さん（寿久－寿利の誤りか）は理解してゐてくれると思ふが，たった一人の母にだけは俺のかうした運動を知らせてもらひたくないよ。この事は決して母に言はないやうにして貰ひ度いぞ。年寄りの母の苦しみをみるにしのびないからネ…」と空の男はなかなか親孝行で熱情家である。

記者「君は一体誰だ，正体をあかし給へ」

男「僕はもと横浜市電にゐた事がある。鎌倉町鵠沼の田辺潔で今年二十

七だ」

記者「どうだもう君の身体がもつまい」

男「御心配は有難う，しかし死ぬつもりで登ったのだ。解決をせねば決して降りない」

一問一答二十五分間，空の男に暇乞ひして煙突を下る。

以上が「会見」の記事だが，当初登ってきたら「一緒に心中するぞ」と潔が強い拒絶反応をしめしていた割りには，比較的容易に話し合いが展開している。この部分にすこし不自然さを感ずるが，頂上部の様子などはやはり当事者だけが知りえた情報となっていて，貴重である。内容全体も好意的で，煙突男とのやり取りもおだやかに表現されている。そしてこの記事がはじめて地上に，煙突男の氏名と住所を伝えたわけである。

むすびにかえて

前掲稿で今後の検討課題を３つほど整理しておいたが，そのうちのひとつである実兄田辺寿利の事件に関する証言はほぼ収集し，本稿で分析し終えたといってよかろう。煙突男潔と最も近い関係にあった兄の肉声は，細かい部分は別として前掲稿の内容と合致するところが多かった。もうひとつの調査課題として，潔自身の発言を収集することの重要性も指摘しておいたが，それは困難が予想される。中公論文の末尾に、寿利は次にように述べている。「弟自身の真意は，彼が釈放の後，本紙を通じて公にされるであらう」と。しかしながら，『中央公論』の後続誌には残念ながらそうした記事を発見できなかったからである。もちろん『改造』も調査してみた。

1933年１月横浜伊勢崎署に逮捕され，そして間もなく署内で潔は殺害されている。煙突男事件釈放後再逮捕までの２年間，全協の運動にかかわっていたため多忙な日々を送っていて，事件に関して発言する暇も十分にはなかったにちがいない。またその間，事件を「小ブルジョア的」と「自己批判」していたと「赤旗」（第122号）に報じられているので，事件直後以外に潔の発言は残されている可能性は少ないといわざるを得ない。

本稿では，これ以上結論めいたことを書くことができない。しかし，いま

ひとつ残された課題について，それをこれまで以上に研究すべき必要性ありと感じているので，最後に多少の言及をしておきたい。

田辺家が金沢近郊からの北海道開拓移民であったことは前掲稿で取り上げたが，今回寿利の改造論文の内容，とくに潔の少年時代からの性行を事件とかかわらせるという兄の捉え方を読んだ結果，北海道開拓に関して検討すべきであるとより強く意識した。いわゆる屯田兵について，北陸地方からの参加が多かったことは一般的によく指摘されている。しかし，それ以上の特段の知識をこれまでの筆者は持っていなかった。

従来の研究は，桑原真人によると「屯田兵の移住と開拓の実態を究明することに力点が置かれ」[10]，その分量は膨大なものとして残されているという。手がかりは十分に存在する。しかし同じく桑原による屯田兵制度の成立過程の研究は少ないようで，彼の研究によるとそれは次のような経緯であった。

1869（明治２）年７月（陰暦）の開拓使設置当初から「士族授産」「富国強兵」の一環として「屯田兵」は企図されていたが，屯田兵例則にもとづいて制度化されたのは1874年10月以降のことであった。それは北海道の警備と治安維持にあたるとともに，農業開拓の任務も与えられた。当時は士族屯田が通例であったが，1880年代には「屯田養子」の例が現れるなどして，1890年からは平民屯田がおこなわれるようになった。そして1904年に屯田兵条例が廃止されたのである。

とするならば，田辺家は屯田平民として北海道に1890年以降入植したわけで，それは潔の父の代の可能性が高いこととなる。その点では前掲稿は少し修正する必要があると思われるが，なお検討を要する部分もある。前の改造論文の引用中，田辺寿利は弟に対して「インテリの子は真の労働者にはなり得ない」と諭しており，彼らの父が農業者ではなかったと推測させる発言があるからである。それはともかくとして最近では，北海道に送り出した側の歴史的事情を重視する研究も成果を上げているが，それによると石川県からの北海道への移民は，1900年前後にピークを迎えている[11]。1903年に田辺潔は釧路で誕生しており，この点を入り口として現地調査を含めた研究の積み重ねが今後必要であろう。

〔注〕

1）橋本哲哉「煙突男田辺潔小論」『金沢大学経済学部論集』第17巻２号（1997年３月）所収。

2）前掲「煙突男田辺潔小論」は日本史辞典の「煙突男」の項目を執筆することをきっかけにして考究した。その辞典原稿で筆者が書こうとした「煙突男」事件の内容を，参考のために次に掲げる。

煙突男　えんとつおこと　1930年の富士瓦斯紡川崎工場争議に関連して出現した第１号で，争議の要求を貫徹して評判となった。不況下の赤字経営で会社側は従業員の解雇を発表し，６月に総同盟指導の争議となった。いったんは解決したが，11月労農党影響下の従業員がストに入った。16日早朝，応援のため田辺潔（先祖は加賀藩金沢田井村の十村役で，北海道開拓移民に関係）が40m余の工場の大煙突頂上部に昇り，赤旗を振り要求実現まで下りずと演説を繰り返した。度々の説得も聞かず，煙と寒さに耐えて滞空130時間に及んだ。見物人が一万人も集まり，また天皇の神戸の観艦式行幸の帰途列車から赤旗が見えるのを心配した川崎警察署長が調停して，21日に争議は解決した。以降各地の争議に煙突男が出現したが，田辺は33年横浜で怪死した。

3）田辺寿利「煙突男とは？」『改造』昭和６年新年号（1931年１月）所収。

4）田辺寿利「兄より見たる『煙突男』」『中央公論』第46年新年特輯号（1931年１月）所収。なお，目次では「兄から見た『煙突男』」となっている。以上の２論文とも刊行中の『田辺寿利著作集』（未来社）には記録されていない。また，従来の煙突男・田辺潔に関する叙述・研究ではこの２論文の引用は見られない。

5）以上の引用は，前掲「兄より見たる『煙突男』」であるが，短い論文で煩雑ともなるので引用頁は省略した。なお，論文中，石原善行とあるが，美行の間違いであろう。

6）堅山利忠編『神奈川県労働運動史（戦前編）』（神奈川県労政課，1966年２月）612頁。なお，その主要部分は前掲の橋本哲哉論文に引用してあるので，参照されたい。

7）以上の引用は，前掲「煙突男とは？」であるが，これも引用頁は省略した。

8）前掲『改造』昭和６年新年号所収。

9）京都大学附属図書館所蔵「時事新報」（マイクロ版）の閲覧にあたっては，同図書館雑誌・特殊資料掛長中司里美氏のお世話になった。ここに記して謝意を表したい。

10）桑原真人『戦前期北海道の史的研究』（北海道大学図書刊行会，1993年２月）４頁。

11）田中彰・桑原真人『北海道開拓と移民』（吉川弘文館，1996年２月）72頁。本書は高知県からの北海道移民について詳述している。また，伊藤広著『屯田兵村の百年』（上・中・下，北海道新聞社），同著『屯田兵物語』（北海道教育社，1984年９月）には旧屯田兵村全37か村の調査記録と入植者名簿が記載されている。この名簿のなかには，田辺姓の入植者を発見しえない。石川県からの入植に関しては森栄松「屯田兵の北海道開拓と石川県人の活動」（『金沢工業高等専門学校研究紀要』第４号，1969年）をはじめとして一定の研究がある。

（1998年１月８日成稿）